実践報告

保幼小と連携した読書活動の推進
― 豊かな心と確かな学力の育成のために ―

橋　本　京　子

1. 研究概要

小学校低学年の学力差の大きな背景に語彙の量と質の違いがあり、その後の学力差の拡大に大きく影響することや、思考を深めたり活性化させたりする語彙の育成が重要であることが指摘されている。語彙を豊かにするためには、読書が有効であることは、これまでの様々な研究成果で示されている。

読書は、多くの語彙や多様な表現を通して様々な世界に触れさせ、言語能力や思考力を向上させる言語活動として不可欠である。さらに、読書は人間形成に大きな役割を担うことも様々な調査に表れている。

多様で膨大な情報が飛び交い、瞬時に判断を求められる時代だからこそ、その思考や判断・表現の基盤を培うために、本（言葉）と向き合い熟考熟慮する知性（認知能力）、本（言葉）の中に心躍らせる感性や想像力、人生と社会を豊かにする人間性や意思（非認知能力）を育む必要がある。

精華町においては、子ども読書活動推進会議を中心に長年町全体で読書活動に取り組んでいるが、一人一人の認知能力・非認知能力をさらに高め、学力の向上につながる手立てとして、より効果のある取組を進めることが求められている。そこで、読書活動を充実させ課題解決を図るために、非認知能力や語彙を育む土壌である就学前教育機関と小学校の連携の中で、「豊かなことばを育み、心を育てる読書活動（認知能力・非認知能力の育成）」について調査研究を進めてきた。精華町子ども読書推進会議とも協働しつつ、読書に関わる実態、語彙力や学力に関わる実態を３年間にわたって調査し、読書が認知能力や非認知能力を育成する上で深い関わりがあることやこれからの取組に求められることを確認した。

2. 研究成果

(1) 研究の内容・方法

①研究協力保育所・幼稚園・小学校の読書活動の実態調査を行う。同時に、研究協力対象保育所、幼稚園の家庭読書の実態調査を行う。（経年変化を把握する…3 年計画）

・研究協力保育所・幼稚園・小学校の読書活動の実態調査

読書の時間の確保時数（日月単位）、担当者、蔵書数、各保・幼・小における読書活動の工夫点等

・研究協力対象の家庭の実態調査

読書の時間の確保時数（日月単位）、蔵書数、関わり方、読書への工夫、保護者の意識

・子どもの読書や意識に関する調査

読書時間、読書冊数、読書への意識、傾向、非認知に関わる意識等

②　研究協力保育所・幼稚園・小学校の幼児、児童の語彙力の実態調査を行う。（経年変化把握）

・研究協力保育所・幼稚園・小学校の幼児、児童の語彙力の実態調査

保育所、幼稚園は５歳児対象、小学生は全学年の児童対象

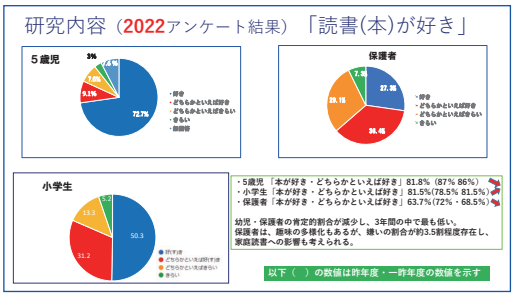
・語彙の量と質の調査内容については先行研究を基に作成

③　研究協力校区の学力等の実態の把握を行い読書活動との相関関係を把握する。

⑵ 研究協力保育所・幼稚園・小学校の調査結果

今回の調査について、その結果を下記に整理する。なお、分析においては単純集計およびクロス集計を実施し、クロス集計時においてはカイ二乗検定を行い有意差の確認を行った。統計分析には IBM SPSS 23 Statistics Base を使用した。３年目の調査であることから経年変化についても報告する。

①　子どもの読書や意識に関する調査



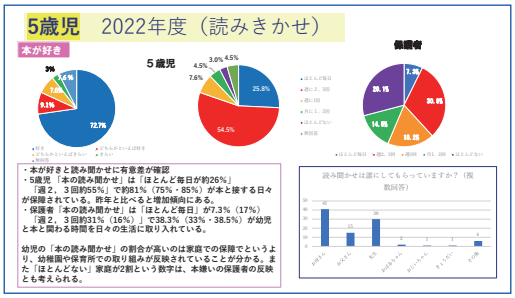
５歳児、５歳児保護者、児童の読書意識の基本となる質問「読書（本）が好き」について、「本が好き・どちらかといえば好き」という肯定的回答は、５歳児 81.8%（87％ 86％）、小学生 81.5%（78.5% 81.5%）

保護者 63.7%（72%・68.5%）であった。幼児・保護者の肯定的回答の減少傾向が見られる。（）内の数字は昨年度、一昨年度の数値である。以下の文章でも同様に使用する。保護者は、趣味や余暇の多様化や成人になる過程での影響もあるが、嫌いの割合が約 3.5 割存在し、家庭読書への影響が考えられる。

〈5 歳児の調査より〉

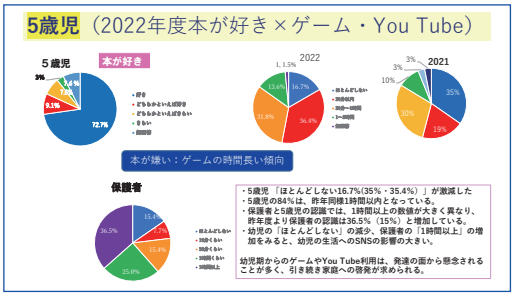
次に５歳児の本に関わる調査について、特徴的な項目についてまとめた。

「読み聞かせ」



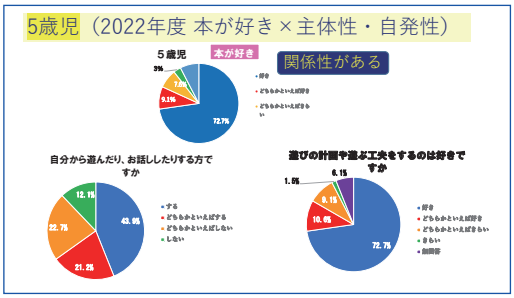
「本の読み聞かせ」は「ほとんど毎日が約 26％」「週 2，３回約 55％」で約 81％が本と接する日々が保障され、昨年と比べると増加傾向にある。しかし、これは保護者の調査「ほとんど毎日 7.3%」「週 2, 3 回（31%）」38.2%（33%・38.5%）と併せて検討すると５歳児の「読み聞かせ」の割合が高いのは家庭での実情ではなく、幼稚園や保育所での取り組みが反映されていることが分かる。また家庭での読み聞かせが「ほとんどない」家庭が３割という数字は、本嫌いの保護者の反映も考えられる。こうした状況は３年間同じ傾向にある。

「ゲームや You Tube」



「ゲームや You Tube」については、5 歳児「ほとんどしない 16.7%（35%・35.4%）」が激減し、8 割強の 5 歳児が利用している。利用時間については保護者と 5 歳児の認識が異なり、保護者の 1 時間以上の回答は 36.5%（15%）と増加した。こうしたことから年々、幼児の生活に SNS の影響が拡大してきたことが覗える。幼児期からのゲームや You Tube 利用は、発達面から懸念されることが多く、引き続き家庭への啓発が求められる。また「本が好き」と「ゲーム、ユーチューブ使用」の関係性がみられ（χ二乗検定による）、「本が嫌い」と答えた幼児は、ゲーム等の時間が長いことが覗えた。

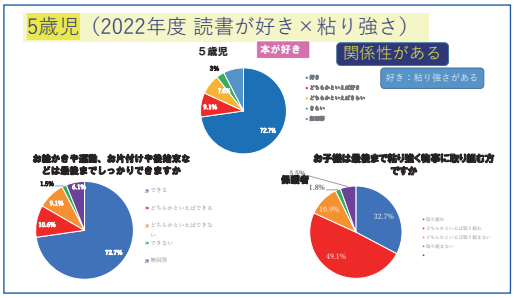
「主体性」



「自分から～する」「計画や工夫が好き」という主体性や自発性に関わる質問のうち、「自分から～する」については、肯定的な回答の割合は、65.1％（78％・68％）と減少したが、「計画を立てたり工夫をしたりする」ことに肯定的な割合は 83.3％（81％・68％）であり、昨年より高い割合である。

・「本が好き」81.8％と「計画を立てたり工夫をしたりする」との関係性がみられる。（χ二乗検定による）

「粘り強さ」

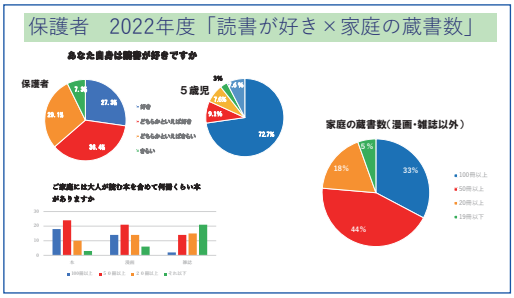


粘り強さに関わる質問「最後までしっかり取り組むか」に対して肯定的に答えた 5 歳児は約 83.3％で、主体的な態度よりやや多い数値であった。保護者の肯定的回答の割合は、やや低めであったが、「本が好き」と答えた数値ともほぼ同じ数値であり、「本は好き」と「粘り強さ」の関係についてカイ二乗検定でみた結果、有意差がみられ、残渣より「本が好き」な幼児は「粘り強さ」があり ,「嫌い」な幼児は「粘り強さ」も低い傾向がみられた。「本は好き」と「粘り強さ」の関係性がみられた。

〈5 歳児保護者の調査より〉

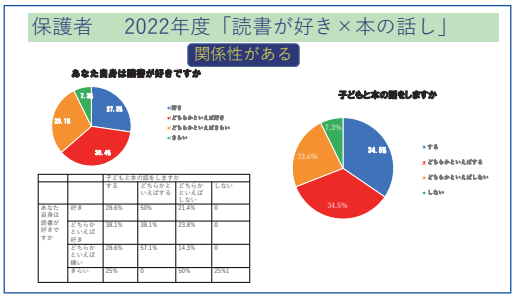
次に 5 歳児保護者の本に関わる調査について、特徴的な項目についてまとめた。

「家庭の蔵書」について



保護者の「本が好き･どちらかといえば好き」は 63.7％であり、５歳児の肯定的割合 81.8％と比べると 18 ポイントの差が見られた。しかし、保護者の肯定的な割合 63.7％（72％・68％）は低下しているが、家庭の蔵書数は 50 冊以上 77％（50％､43.6％）と 27 ポイント増加した。「本が嫌い・どちらかというと嫌い」と回答している家庭においても一定の蔵書があることが確認できた。このことから、「本が好き」と言い切る５歳児 72.7％と「家庭蔵書」77％の関りも考えられ、家庭における読書環境の重要性が覗える。

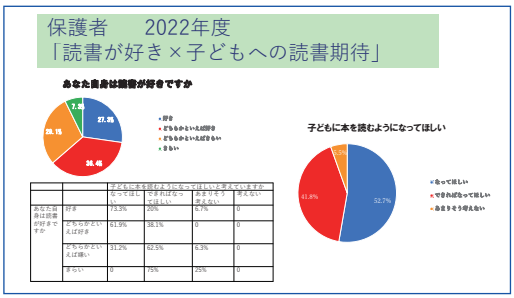
「子どもと本の話しをする」について



子どもと「本の話をする」の肯定的回答が 69％（75％・69.2％）と昨年度より約６ポイント減少している。しかし、本が好きという肯定的回答より約６ポイント多いことは保護者の努力の現れとも考えられる。

「お子様は１ヶ月に何冊くらいの本を読みますか」と「子どもと本の話をしますか」の間には有意差が確認された（χ2（9, N=63）= 22.524, p<.01）。残渣から「する」と回答し、11 冊以上の読書量と回答した家庭は、他に比べて「する」の値が多く、また１－３冊と回答した者はどちらかといえばしないと回答した割合が高い。本の話が行われる家庭環境は、保護者の意識や幼児の読書冊数と関わりが強く、家庭読書や５歳児の読書意識への影響が覗える。

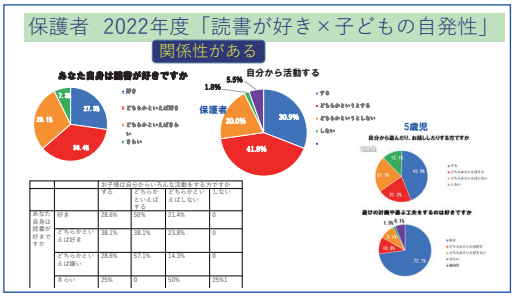
「子どもへの読書期待」について



子どもへの読書期待は、昨年同様圧倒的に高く、肯定的な数値は約 95％である。保護者自身の読書への肯定的な数に関わらず期待は大きい。

また、子どもの読書冊数（「お子様は１ヶ月に何冊くらいの本を読みますか」）と「子どもに本を読むようになってほしいと考えていますか」の間には有意差が確認された（χ2（9, N=63）=19.300, p<.05）。多くの保護者の読書期待は高いが、なかでも子どもの読書冊数が多いと読書期待の意識が高い傾向があることが分かった。

「自発性」について



		お子様は自分からいろんな活動をする方ですか			
		する	どちらかといえばする	どちらかといえばしない	しない
あなた自身は読書が好きですか	好き	28.6%	50%	21.4%	0
	どちらかといえば好き	38.1%	38.1%	23.8%	0
	どちらかといえば嫌い	28.6%	57.1%	14.3%	0
	きらい	25%	0	50%	25%1

保護者「こどもは自分から活動する」72.7%と回答している。5歳児自身の自主性のカテゴリーの違いはあるが、平均すると保護者とほぼ同値である。「あなた自身は読書が好きですか」と「お子様は自分からいろんな活動をする方ですか」の間で有意差あり（$\chi 2$（9, N=53）= 17.055, p<.05）。残渣から嫌いの群において、しないとする割合が高いことが窺える。

5歳児・5歳児保護者の読書や意識（非認知能力）に関わる調査のまとめ

（5歳児、5歳児保護者の特徴的項目）

・5歳児、5歳児保護者ともに、「本が好き」は減少（3年間で最低値）している。

（5歳児の特徴的項目）

・3年間「読み聞かせ」の頻度の割合が高いのは、幼稚園や保育所の取組によるものが多く、家庭での読み聞かせは、共働きなど家庭生活の忙しさからか減少傾向にある。

・「ゲーム、YouTube」は「ほとんどしない」回答が激減し、昨年度より関わる人数も時間が増加。

・「本が好き」×「主体性」「粘り強さ」のクロス集計で有意差が認められた。

（5歳児保護者の特徴的項目）

・子どもへの読書期待値は高く、幼児の読書冊数と有意差があり、関係性が見られる。

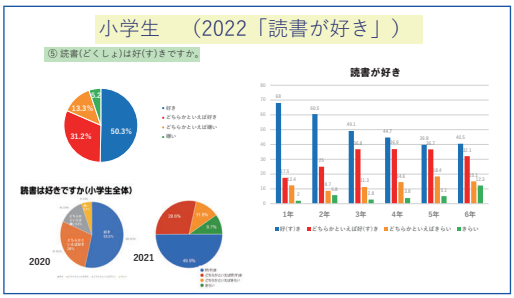
・読書が好きと回答した保護者は63.7%と減少、子どもと本の話しをするも減少したが、蔵書については増加、50冊以上が77%とあり、幼児の「好き」の数字に対応することから読書環境あり。

・保護者の読書意識・傾向によって幼児の読書環境は大きく影響している。（蔵書数、本の話し、自主性等）

〈小学生の調査より〉

小学生の調査では、全体と各学年に分けて傾向を見ることとした。また「読書は好き」とのクロス集計で関係性の高いものを基本とするが、特徴のあるものについて記述する。

「読書が好き」

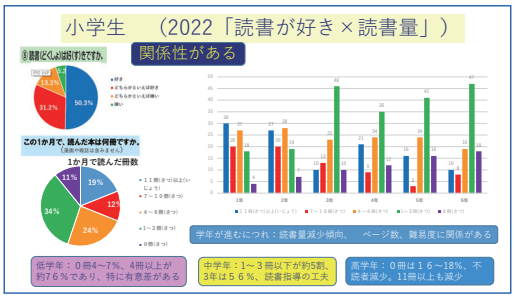


「読書が好き」と肯定的に回答する児童は、学年が上がるに従って減少しているが、全体的な傾向として「好き」「どちらかといえば好き」は81.5%（78.5%、81.6%）ととなり、昨年より3ポイント増加している。

学年別で見ると、肯定的回答は、1年生85.5%、2年生85.5%、3年生85.9%（86.9%）4年生81.5%（84.6%　77.1%）5年生76.5%（79.5%　81.8%）、6年生72.7%（69.6%　73.5%）となっている。

1年生から4年生までの8割以上が肯定的数値であり、6年の数値が上がっていることからも、全体の数値が増加したことが分かる。

「読書量」



「読書量」も学年が上がるに従って減少している。これは意識の変化もあるが、高学年の書籍の特質（ページ数が多い、難度が上がる）にも関係していると思われる。

「この一ヶ月で読んだ本の冊数」は 1, 2 年生と 3 ～ 6 年生に有意差がみられた。

0 冊は、全体で 11%（15.7）と減少し、1 年 4%（6.4%）、3 年 10%（14.2%）、4 年 12%（19.8%）、5 年 16 %（18.3）6 年 18 %（22.6%）どの学年も不読者減少している。

11 冊以上は、1 年生 30% , 2 年生 27%と多く、3 年生以上は 1 ～ 3 冊の割合が多いが、「読書が好きですか」との χ 二乗検定では、

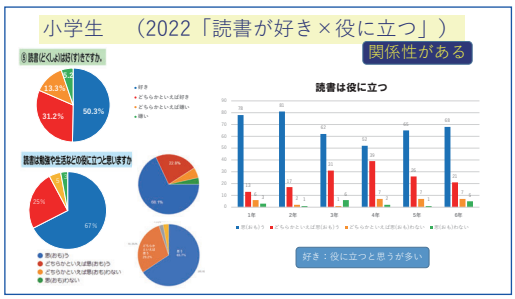
3 年（$\chi 2$ (12, N=99) =53.416, p<.01)、

4 年（$\chi 2$ (12, N=96) =33.136, p<.01)、

5 年（$\chi 2$ (12, N=93) =44.120, p<.001)、

6 年（$\chi 2$ (12, N=101) =74.950, p<.001）で有意差が見られた。残渣から好きと回答したものは 11 冊以上の割合が高い。

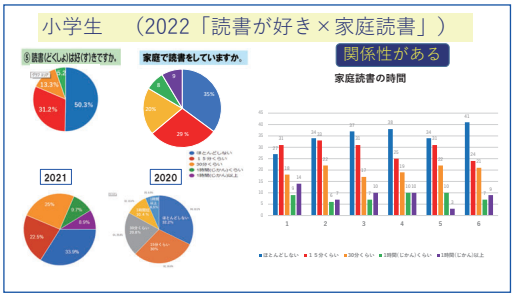
「読書は役に立つ」



「読書は役に立つ」と肯定的に考える児童は 92%（91%　95%）であり、どの学年も肯定的な数値が高く、有意差が見られ、関係性が高くなっている。残滓から「好き」と回答したものがそう思う割合が高い。特に 2 年生は 98%との肯定的数値が高かった。（好きは 85.5%）

読書が好きな児童は「役に立つ」と考える児童が多い。

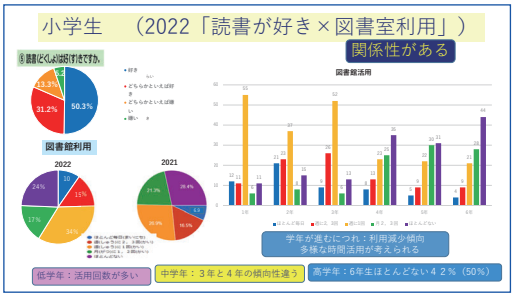
「家庭での読書時間」



「家庭での読書時間」について、「ほとんどしない」は 35%（33%、32%）と微増している。増加傾向は、3, 4 年と 6 年生に多く見られる。中学年では、生活や興味の多面化が生じるためか全体的に家庭読書の量が減り、6 年生では、全くしない児童が 41%（44%、46%）と多くなっている。また、3 年間の経年変化として、6 年生は 5 年時「ほとんどしない」が 20%弱、4 年時 25%であったが、6 年時では 41%と増加し、塾や習い事など生活面での忙しさにより読書の時間が減少すると考えられる。ただ、3 年生以上では「読書が好き」とのクロス集計では有意差があり、強い関係性が見られており、残渣から読書が好きなものほど時間が多く、逆にそうでない者はほとんどしない傾向が見られている。学年ごとの変化ということもあるが、経年変化を見ると学年の読書傾向の特長が見られる。

家庭読書の時間は 1 年生が一番多く、全学年では 15 分が昨年同様多くなった。

「図書室活用」



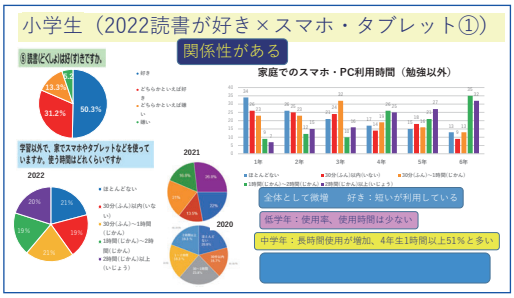
「学校図書室の活用」については１～３年生で多く、学年が進むにつれ減少傾向にあり、３年間同じ傾向にある。学習に関わる活用との頻

度は明確ではないが２，３年生の活用頻度は高く、１～３年生では週１回が多い。

反対に「ほとんどない」は４年生以上特に６年生に多く見られる。休み時間の使い方が外遊び中心になる傾向や高学年になると多様な時間の活用になり、活用頻度が少なくなっている。

「読書が好き」とのクロス集計では４，５年以外では有意差が見られ、残渣から読書をしないものほど図書館の活用が行われていないことが示された。

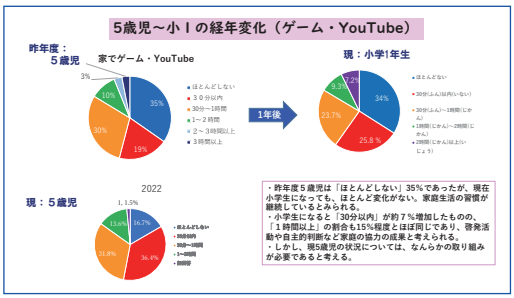
「スマホやタブレットの活用」



「学習以外でのスマホ等利用時間」は、全体として微増している。また「読書が好き」という児童も時間は短いが全般的に活用していることが分かった。

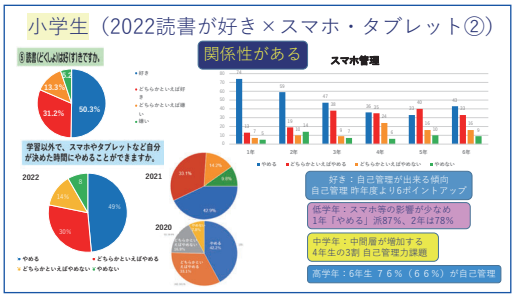
低学年での活用時間は短く、ほとんどしない児童も 32％いる。中学年になると長時間使用が増加、４年生では１時間以上 51％と多い。高学年では、１時間以上使用の児童が半数になる。特に６年は 67％と多い（２時間以上は昨年度より 13 ポイント減少）。「読書が好き」という児童も時間は短いが全般的に活用していることが分かった。「読書が好き」とのクロス集計で顕著に関係性見られる学年（1，5，6 年）では、読書が嫌いと回答した児童はスマホ等２時間以上の割合が多い。

「スマホやタブレットの活用」経年変化



令和３年度５歳児（令和４年度）の経年変化をみると、「ほとんどしない」35％であった。現在小学生になっても、ほとんど数値に変化がない。家庭生活の習慣が継続しているとみられる。小学生になり「30 分以内」が約７％増加したものの、「1 時間以上」は 15％程度とほぼ同じであり、啓発活動や自主的判断など家庭の協力の成果と考えられる。

「スマホなどを自分でやめられるか」



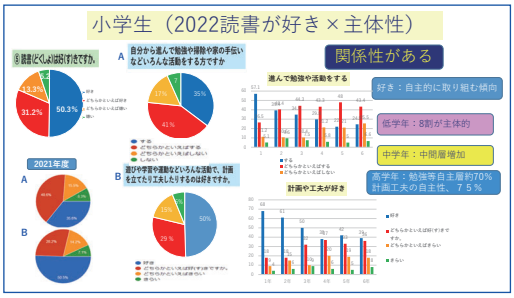
「スマホなどを自分でやめられるか」については、低学年は１年「「やめる・どちらかといえばやめる」87％、２年 78％と多く、そのうち半数以上が「やめる」という明確な回答であった。中学年になると「どちらかといえば」という中間層が増加し、４年生では「やめられない」派が 30％と一番多く、自己管理力が課題となってきている。高学年では、「やめられない」はやや減少し、６年生は 76％（66％、68％）と昨年５年生時の 80.7％より微減したが、６年生としての３年間の変化をみると自己管理できる層が増加した。

また、「読書が好き」とのクロス集計では、「読書が好き」と回答する児童は自己管理が出来る傾向が認められた。自己管理については全体として 昨年度より６ポイントアップした。

「主体性」

「自分から進んで活動する」

「計画や工夫が好き」

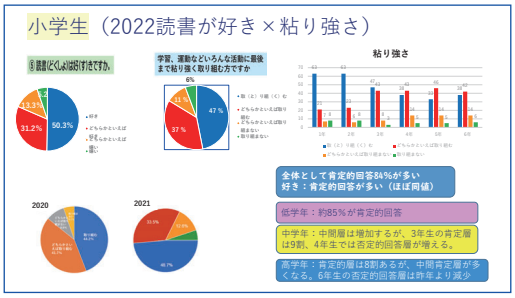


「勉強や家の手伝いを自分から進んでする」という一定の困難さを伴う活動に対する質問では、低学年では８割が肯定的回答であったが、中高学年では、「どちらかというと」という中間層が増加している。６学年では、肯定層は 68％（５年生時 77％、４年生時 75％）となり、減少している。

一方、計画や工夫に対する主体性に関わる質問では、中高学年も肯定層が増加し、主体性の活動内容による差が明確に見られた。

「読書が好き」というクロス集計では、低中学年に関係性が強くみられ、残渣から読書が好きな児童に自主的な傾向があるとみられた。

「粘り強さ」

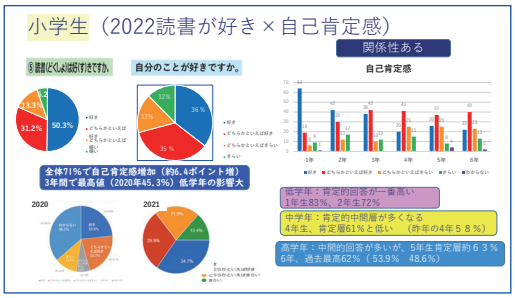


全体として肯定的回答 84％（82％、86％）が多く、読書が好きという肯定的回答とほぼ同値である。

低学年では約 85％が肯定的回答であった。中学年では中間層が増加するものの３年生の肯定層は９割であった。一方４年生では肯定的回答層約８割となり、高学年と同じ値であった。高学年の肯定的層は約８割あり、中学年と同じように中間肯定層が多い。６年生の否定的回答層は５年生時（11.8％）より増加している。

「読書が好き」とのクロス集計については、１年生では有意に関係性がみられ、他の学年でも関係性が認められた。

「自己肯定感」

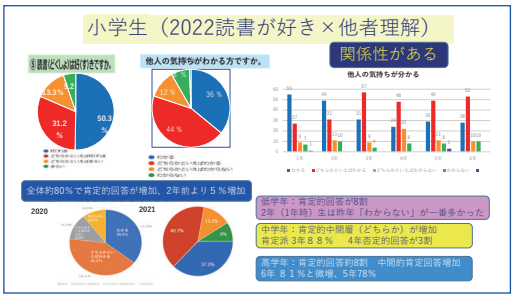


全体で平均71％（61.6％、45.3％）と増加している。低学年の肯定的回答が高く、1年生は83％、2年生72％であった。中学年では中間層が多くなり、4年生の肯定層61％（58％、46.5％）は全学年で最も低かった。高学年では5年生が肯定層約63％（68.8％　45.5％）、6年生は約62％（53.9％、48.6％）と増加し、中間的回答は多いが3年間で最高の肯定的回答になった。また、5年生は4年生時、否定的数値が41.7％であったが、肯定層が5ポイント増加した。6年生は4年生時「分からない」の回答が41.4％と多かったが、5年時では肯定的回答が68.8％となり今回の数値に繋がったと考える。

一般的に小学校中学年は「9～10歳の壁」と言われる精神的発達の状態が現れる時期でプレ思春期といわれるが、この調査でも、3年間ともに「分からない」否定的回答が多く見られ、自他を比較して観る力の発現による自分認識の割合の現れと考える。

「読書が好き」とのクロス集計では有意差があり、関係性が認められた。

「他者理解」



「他人の気持ちがわかる方か」について、全体として肯定的回答は80％（77.9％，76.7％）と増加している。低学年は明確に「分かる」と回答する者が多く、2年生は昨年（1年時）「わからない」が約40％であったが20％になり他者理解が進んでいる。中学年は肯定的中間層（どちらか）が増加、3年生は88％（78.8％84.1％）と全学年中で1番高く、一方4年生は72％（77.1％）と一番低かった。高学年も中間層が増えているが、肯定的回答は5年生78％（79.6％、73.3％）、6年生は81％（74.5％、72.9％）と増加した。中高学年の中間肯定層「どちらかというと」が半数近くに増加するのは、発達段階における自己省察や自己認識の差が現れてくるものと考えられる。

「読書が好き」とのクロス集計では有意差があり、関係性が認められる。残渣から「読書」を通して他者理解が進んでいることがわかる。

小学生の読書や意識（非認知能力）に関わる調査のまとめ

（小学生の特徴的項目…設問20項目中）

・3年間「読書が好き」と肯定的に回答する児童は、学年が上がるに従って減少し、「読書量」も学年が上がるに従って減少。（生活や意識の変化、読む書籍の特質の影響）

・本年度「読書が好き」の肯定的回答がやや増加、全体として「読書が好き」とのクロス集計で有意差は全ての項目にあり、読書との関係性が認められた。

・中学年（4年生）の傾向が年々、プレ思春期的回答が見られる。

・経年変化（昨年度5歳・1年・2年・3年・4年・5年次と比較）の特徴として

（1年生）「読書が好き」ほぼ同じ、自主性は7ポイント増加、小学校生活での活動の広がりの影響も考えられる。ゲーム等「ほとんどしない」が激減した。

（2年生）「読書が好き」7ポイント増、家庭読書、図書館利用も増加、全体として肯定的数値増加している。

（3年生）全項目として中間的回答が多くなっているが肯定的数値は高い。読書冊数1～3冊

の割合 45％と多く、読書量は中学年としては少ない。

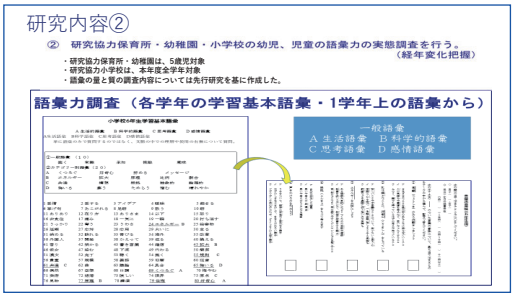
（4 年生）中間的回答が最多、6 年生と同じ数値が多く高学年的傾向が見られる。「スマホ等自己管理」「自己肯定感」「他者理解」が 6 学年中最も低い。プレ思春期的傾向が見られる。

（5 年生）「読書好き」は微減したが、不読者は微減している。調査項目の多くで 4 年生時と同値又は否定的数値が微増しているが、図書室利用や自己肯定感は増加している。

（6 年生）「読書好き」は微減、5 年生時の肯定的数値が一番高かった「家庭読書」「自主性」「粘り強さ」「自己肯定感」等、が減少したが、6 年生としては 3 年間を通して肯定的数値は高い。「スマホ自己管理」ほぼ同値で「やめる」が増加し中間層が減少した。スマホ時間は長いが、自己管理ができている傾向がある。低中学年からの積み上げが覗われる。

②　幼児、児童の語彙力の実態調査

読書と語彙力の関係についての調査も経年変化を捉えることとしている。

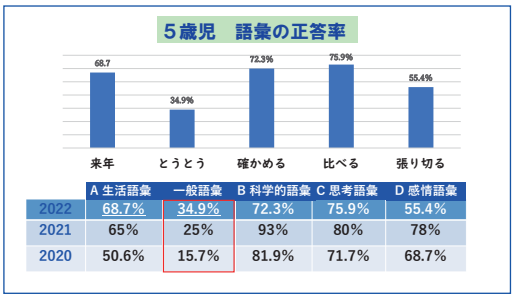


語彙調査の対象語彙は、調査対象学年の学習基本語彙ではなく、1 学年上に位置付けられる学習基本語彙から選定した。理由としては、読書習慣ができている子どもは、幅広い読書の中で上学年の語彙を含む内容の本を読んでいる可能性は高く、言葉の意味の認識がある程度広がっていると考えからである。5 歳児に関しては、小学校 1，2 年生の学習基本語彙を対象としている。

調査方法としては、5 歳児の場合、調査者が被験者から直接聞き取りを行い、言葉（語彙）を状況の中で認識できているかどうかを把握した。また、小学生の場合は選択法（昨年度よりパソコン入力）により、言葉の認識度について把握した。

語彙の把握については、特定の分野の語彙ではなく、広く語彙を獲得しているかについて調査することとし、学習基本語彙を一般語彙、生活語彙、科学的語彙、思考語彙、感情語彙の 5 つに分け、無作為に抽出したそれぞれ 1 つずつの語彙を質問した。語彙分類は調査者が行った。結果としては、必ずしも語彙獲得状況を示すものではないが、傾向性としての把握が行えたと考える。

（5 歳児の結果から）



	A 生活語彙	一般語彙	B 科学的語彙	C 思考語彙	D 感情語彙
2022	68.7%	34.9%	72.3%	75.9%	55.4%
2021	65%	25%	93%	80%	78%
2020	50.6%	15.7%	81.9%	71.7%	68.7%

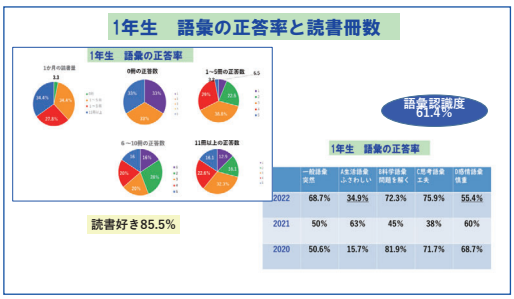
一般語彙「とうとう」の認識度は約 34.9（25％、15.7 ％）、生活語彙「来年」68.7 ％（65 ％、50.6％）と低い認識ではあるが増加した。一方、科学的語彙「（たしかめる）」や思考語彙（比べる）」、感情語彙「（張り切る）」は減少し、特に感情語彙は約半数の認識であった。

一般語彙「とうとう」や感情語彙「張り切る」は 5 歳児の生活の中で使用頻度が低く、反対に科学的語彙「確かめる」や思考語彙「比べる」、感情語彙「張り切る」はやや減少したものの生

活面での使用頻度の高さがうかがわれた。

全体としての語彙認識の割合は 61.4%（68.2%, 57.7%）となっており、発達段階から考えても、語彙の認識と本との関わりは余り考えられない状況である。

（1 年生の結果から）

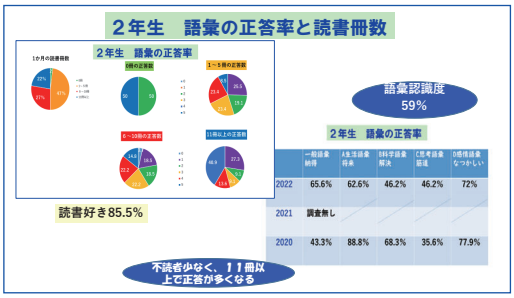


語彙認識度 61.4%（51％ , 57.2%）であり、3 年間では最も高く、5 歳児時の語彙認識（68%）の高さが継続している。1 か月読書冊数 0 冊の児童の正答数は少ない。

一般語彙、感情語彙の認識は低いが、科学・思考語彙認識は高い。

幼児期、読書好きが 87% であったことからも、読書を含め、幼児期の生活の中で語彙を増やしていくことが大切であると考える。

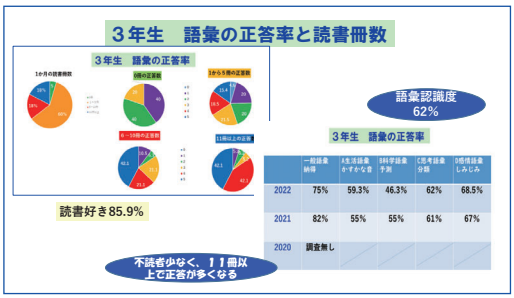
（2 年生の結果から）



語彙認識は約 59％（62.8%　2020 の 1 年生）と低くなったが、現 2 年生としては 1 年生の時（51％）より学習や生活経験も含めて 7.5 ポイント高くなったと考えられる。科学（解決）・思考（筋道）語彙認識は 1 年次と同様に低かった。

平均読書冊数 0 冊の正答数は二極化が見られた。読書冊数が増えるに従って、正答数は増加しているが、11 冊以上での正答数 1 が 27.3% については要因を探る必要がある。

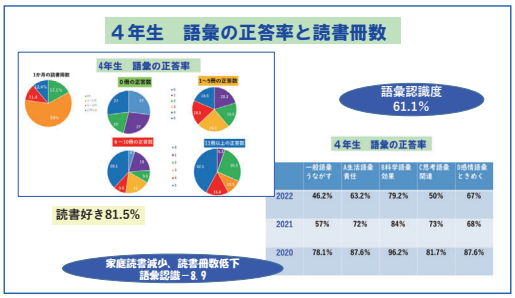
（3 年生の結果から）



3 年生の語彙認識は約 62％（64%）であり、1 年生時の調査（約 58%）より 4 ポイント高くなっている。生活（かすかな）・科学（予測）語彙の認識度は昨年同様低かった。

1 か月読書冊数 0 冊の児童の正答数は少ない低い。1 ～ 5 冊では正答なし 4.6%、正答数 5 は 15.4％であるが、6 冊以上になると、正答数が 42.1％。11 冊以上では正答数 4 と 5 で 84.2% となっている。

（4 年生の結果から）



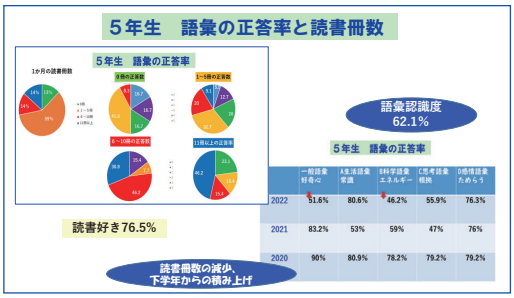
全般的な語彙認識は 61.1％（70.8％　86％）

と３年間で最も低く、３年生時（64％）より３ポイント低下した。昨年度と同じく、科学的語彙「効果」79.2%（84％　96.2％）は高い認識で、コロナ感染症拡大に伴う社会状況の反映かと考えられる。一般語彙「促す」は 46.2%（57％ 78.1％）と低かった。

該当学年の結果の要因として家庭読書の時間「ほとんどしない」は 38％（32.2％　25％）の増加が考えられる。

１ヶ月読書冊数５冊以下の児童が 75% と最も多い。また、１か月５冊以下児童 61% という状況からも手立てが必要と考える。

（5 年生の結果から）

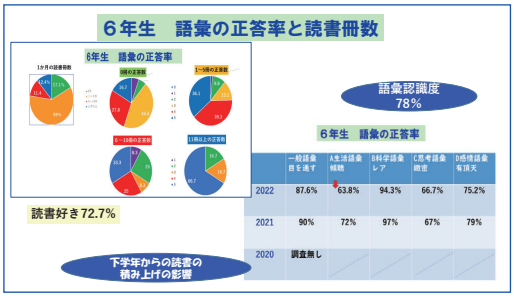


	一般語彙 好奇心	A生活語彙 常識	B科学語彙 エネルギー	C思考語彙 模倣	D感情語彙 ためらう
2022	51.6%	80.6%	46.2%	55.9%	76.3%
2021	83.2%	53%	59%	47%	76%
2020	90%	80.9%	78.2%	79.2%	79.2%

全体的な語彙認識度は 62.1％（約 64％、81.5％）と減少し、４年生時（70.8％）より約８ポイント低下した。特に認識度が低い語彙は、一般語彙「好奇心」科学語彙「エネルギー」（46.2％）であった。

該当学年の結果の要因としては、昨年４年生時と比べ、全体的な読書冊数の減少が考えられる。０～３冊が 50％→ 57％と増え、４～ 10 冊が 33.3％→ 27％と減少。また、４年生時の読書好きの割合（77.1%）、不読者数（16%）、読書量から鑑みると、日常的な読書の積み上げの影響が考えられる。

（6 年生の結果から）



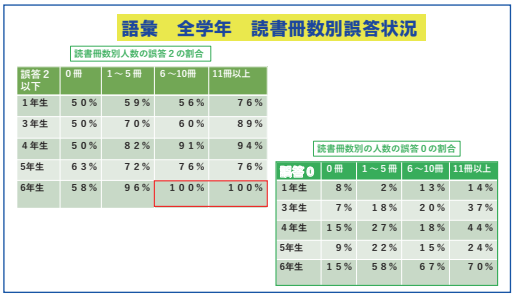
	一般語彙 目を通す	A生活語彙 傾聴	B科学語彙 レア	C思考語彙 緻密	D感情語彙 有頂天
2022	87.6%	63.8%	94.3%	66.7%	75.2%
2021	90%	72%	97%	67%	79%
2020	調査無し				

全体的な語彙認識は約 78％と高い。昨年５年生時 64％より 14 ポイント上がった。認識が一番高い科学的語彙「レア」94.3％は使用頻度が高く、認識の低い語彙は生活語彙「傾聴」63.8％で使用頻度が少ないと考えられる。

４年生時の語彙認識 86%　読書好き 81.6％と高い数値であり、５年時では語彙認識は低下したが、読書好き 79.5% と高学年としては高く、家庭読書も一番多く 30 分以上が 60％であった。こうした読書生活の積み上げの影響が考えられる。

11 冊以上の読書冊数の児童の正答数５が 66.7％あり、読書量と語彙量の関係の強さがうかがわれる。

読書冊数別誤答の割合



読書冊数別人数の誤答２の割合

誤答２以下	０冊	１～５冊	６～10冊	11冊以上
１年生	５０％	５９％	５６％	７６％
３年生	５０％	７０％	６０％	８９％
４年生	５０％	８２％	９１％	９４％
5年生	６３％	７２％	７６％	７６％
6年生	５８％	９６％	１００％	１００％

読書冊数別の人数の誤答０の割合

誤答０	０冊	１～５冊	６～10冊	11冊以上
１年生	８％	２％	１３％	１４％
３年生	７％	１８％	２０％	３７％
４年生	１５％	２７％	１８％	４４％
5年生	９％	２２％	１５％	２４％
6年生	１５％	５８％	６７％	７０％

読書冊数別誤答の割合を学年別で見ると、低学年では、読書冊数にかかわらず平均的な誤答の出現率になっているが、高学年では読書冊数が多くなると誤答の出現率が低くなり、６年生

では6冊以上の全員が誤答2以下であった。

語彙調査と読書の関わりのまとめ

・5歳児（読書好き81.8%）、語彙認識度61.4%（68%・51%）であり、年によって違いはあるが、認識度の高低から考えると日常生活経験の中で得られる語彙が多いと考えられる。

・1年生（読書好き85.5%）、語彙認識度61.4%（51%，57.2%）であり、3年間では最も高く、5歳児の語彙認識（68%）の高さが継続している。一般語彙、感情語彙の認識は低いが、科学・思考語彙認識は高い。また幼児期（読書好き87%）であったことからも、読書を含め、幼児期の生活の中で語彙を増やしていくことが大切であると考える。

・2年生（読書好き85.5%）、語彙認識は59%（62.8%）、1年生時（51%）より学習や生活経験も含めて7.5ポイント高くなったと考えられるが、科学・思考語彙認識は1年時と同様に低かった。

・3年生（読書好き85.9%）の語彙認識は約62%（64%）であり、1年生時の調査（約58%）より4ポイント高くなっている。生活・科学語彙の認識度は昨年同様低かった。

・4年生の（読書好き81.5%）、語彙認識が61.1%（71%, 86%）と、3年間で最も低く、1ヶ月読書冊数5冊以下の児童が75%と最も多い。また、3年次語彙認識約64%、1か月5冊以下児童61%という状況からも何らかの手立てが必要。

・5年生（読書好き76.5%）　語彙認識が約62%（64%、82%）、昨年4生次（71%）とは約9ポイント低下した。一般語彙「好奇心」科学語彙「エネルギー」は50%程度と際立った。4年次の、読書好き（77.1%）、不読者数、読書量からみると、読書からの積み上げの低さの影響は考えられる。

・6年生（読書好き72.7%）　語彙認識が約78%（81%）と高く、5年次（64%）より高まった。4年次の語彙認識86%、読書好き81.6%、5年次では語彙認識は低下したが、読書好き79.5%と高学年としては高く、家庭読書も一番多くあった。こうした読書生活の積み上げの影響が考えられる。

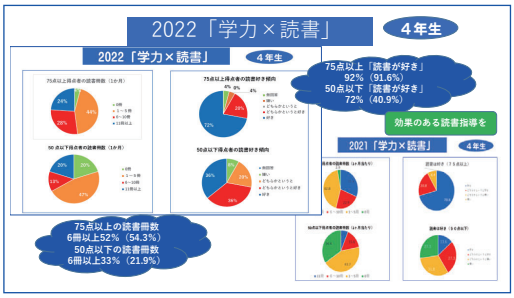
・一般的には、中高学年は低学年と比べると生活や学習、読書の蓄積や広がりの中で語彙認識を高めるが、本年度はその率は緩やかであった。全体として3年間で語彙認識が一番低い状況になっている。3年前が一番高く、調査方法（紙媒体→PC）も原因の一端と考えられるが、家庭読書の時間は全体として少なくなり、スマホ利用が年ごとに増えていることは大きな要因として挙げられると考える。

③　研究協力対象の小学校区の学力等の実態の把握と読書活動との相関関係の把握

学力と読書活動の関係については、4年生（京都府学力診断テスト）と6年生（全国学力学習状況調査）を基に検討した。

4年生では75点以上と50点以下の読書の好悪や1か月の読書量、6年生では11以上得点と5以下得点の読書の好悪と1か月の読書量の比較で検討した。

（4年生　学力×読書）



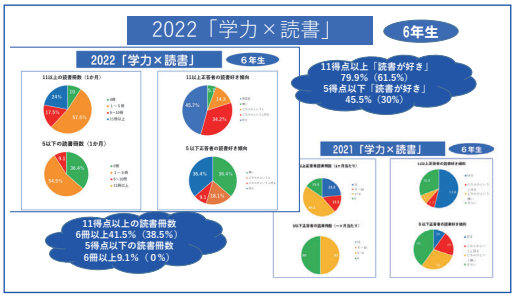
4年生75点以上の児童の「読書が好き」の割合は92%（91.6%）と昨年と同じ数値であっ

た。

50 点以下の児童では 72％（40.9％）と減少するが昨年度と比べると高い数値であった。

また、75 点以上の読書冊数 6 冊以上 52％（54.3％）も昨年とほぼ同値であったが、50 点以下の読書冊数 6 冊以上 33％（21.9％）と減少するが、昨年度と比べると 11 ポイント増加した。

（6 年生　学力×読書）

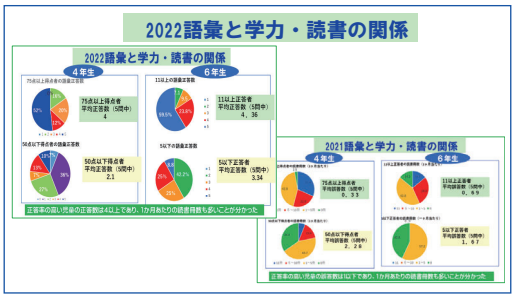


6 年生では 11 得点以上児童の「読書が好き」の割合は 79.9％（61.5％）と昨年より約 18 ポイント増加した。

5 得点以下の児童の「読書が好き」の割合は、11 得点児童より減少するものの昨年度より約 15 ポイント増加し 45.5％（30％）あった。

また、11 得点以上の読書冊数 6 冊以上は 41.5％（38.5％）と昨年より 3 ポイント増加した。5 得点以下の読書冊数 6 冊以上は昨年 0％だったが 9.1％と増加した。

（4・6 年　語彙×学力・読書）



語彙と学力･読書の関係についても検討した。

得点の高い児童の語彙認識度は高く、4 年生で語彙の平均正答数は、5 問中 4、6 年生では 5 問中 4.36 であった。また 1 か月あたりの読書冊数も多い。

得点の低い児童の語彙認識度は高くなく、4 年生で平均正答数は 5 問中 2.1、6 年生では 3.34 であった。1 か月あたりの読書冊数も少ないことが分かった。

学力調査と読書の関わりのまとめ

・得点の高い児童の読書冊数は多く、また「読書が好き」と回答する児童が多い。反対に得点の低い児童の読書冊数は少なく、「読書が嫌い」と回答する割合が 6 年生では約 3 割存在し、6 年では 36.4％、4 年では 20％が不読者である。しかし、全体として不読者は減少している。

・読書と学力との関わりは大きく、生活面や学習面が忙しくなる高学年になる前に、読書習慣を定着させる手立てが重要と考える。

50 点以下の 4 年生で「好き・どちらかといえば好き」と 72％の児童が回答し、その 6 割の児童は、読書冊数も少なくないことから、読書に向かう肯定的な気持ちを大切にして発達段階に応じた効果のある読書指導を工夫することが必要と考える。

様々な言葉や表現に触れたり、本の世界を想像したりする機会を増やすことで、学力向上と結びつく可能性が高い。

④　研究協力対象の保育所、幼稚園・小学校の読書活動の実態の把握

各幼稚園、保育所、小学校の読書に関わる現状、取り組み状況の把握については、3 年間同じ項目でアンケート調査を行った。右記は保育所・幼稚園対象であるが、ほぼ同じ内容で小学校のアンケートも行った。

それぞれ幼稚園、保育所、小学校の設置主体や運営方針により違いが見られ、それぞれ特色ある取組が行われていることが分かった。以下、特徴的な取組内容について紹介する。

（幼稚園・保育所）

それぞれの各幼稚園・保育所運営等の特徴が反映されている取組が多く見られた。コロナ対策を行いながら、工夫のある読書活動を推進、町立図書館との連携などで家庭読書を推進している。

（各幼・保の取り組み状況アンケート）

子どもの読書と生活に関わるアンケート」
読書指導に関わるアンケート

1．乳幼児数について
　0歳児（　　）クラス（　　）人　1歳児（　　）クラス（　　）人
　2歳児（　　）クラス（　　）人　3歳児（　　）クラス（　　）人
　4歳児（　　）クラス（　　）人　5歳児（　　）クラス（　　）人
2．図書室の開室について
ア　週（　　）回
イ　開室時間（　　）平均利用者数（　　）人
ウ　開室の担当者（大人　　）
エ　開室したときの様子：
3．読書タイムについてア　週（　　）回
イ　時間帯（　　）　時間
（　　）
ウ　読書タイムの（特徴的な）様子：
4．読書指導に関わる人について（主に読書指導について計画推進する担当者の立場）
　（　　）
　　活動内容：
5．蔵書について
　約（　　）冊
　1年間の購買図書数（　　）冊　又は予算（　　）円
　選書の仕方・・・選書に関わる人に○を付けてください。
　　子供（　　）　図書館担当教員（　　）　担当以外の教員（　　）
　　その他（　　）
6．クラス文庫について
ア　クラス文庫の設置　（　）有り　（　）無し　イ　平均冊数　約（　　）冊
ウ　集架（本の集め方）について
　　図書室から（　　）冊　精華町図書館から（　　）冊
　　寄贈（　　）冊・・・寄贈元：
　　その他：
エ　クラス文庫の利用の仕方（特徴）
7．読書イベントについて
ア　読書旬間（週間）の取り組み・・具体的な内容
イ　図書、読書に関わる広報、掲示の取り組み・・具体的な内容
ウ　図書ボランティアとの共催の取り組み
エ　その他、学校独自の取り組み
8．読書指導について（学年別の特徴的な読書指導内容）
　0歳児：　　1歳児：
　2歳児：　　3歳児：
　4歳児：　　5歳児：
9．連携した取り組みについて（保・幼・小・中、精華町図書館などとの連携した取り組み）
10．課題について（図書室運営や読書指導について課題と思われること）

○共通して取り組まれていることは、
・ほぼ毎日、担任からの読み聞かせを行っている。
・クラス文庫の日常的な利用をしている。（登園後、昼食前後、お帰り前、バス待ち時間等）
・日常的な生活や行事、遊びと関わる読書の進め方を行っている。
・子ども読書推進５カ年計画に基づき、定期的に活動の報告を行っている。
○特徴ある取組として
・週１回読書タイム‥大型絵本や大型紙芝居など、日頃の読み聞かせとは違うお話。
・図書コーナーにおすすめの季節の絵本や、新しい本の紹介コーナーを設置
・幼児クラスのみ月に一度絵本貸し出しを行う。
・発達段階に応じた読書指導
・図書館訪問→親子で図書館に行くように促す取組
・絵本貸し出しの充実　（バーババパ号：公立移動図書館の利用）
・保護者向けニーズに合う本の充実
○特徴的課題
　保護者の意識に大きく左右され、勤務の忙しい家庭が増える中、子どもとの読書に余裕の時間が無いことが現実であり、貸出図書を利用する家庭が固定化、子どもとの読書の時間がない家庭も少なくない。
　家庭によって大きく差があるので、全ての家庭において親子で絵本に触れる機会を持ちやすいよう、啓発方法を模索している。
・スマホやネットに溢れる不確かな情報に惑わされ、子育てに行き詰まっている保護者が多く、子育ての悩みを共有できるような、ニーズに合う文庫の検討している。
・子どもたちがより本に親しめるための図書室への職員の配置の工夫
・絵本コーナーのさらなる充実
・新型コロナによる影響（ボランティアの活用）の克服

（小学校）

精華町の方針を基に、各校の工夫を反映して

いる取組が見られた。コロナ禍にあっても、工夫のある読書活動を推進、また継続性のある活動で読書習慣をつけている。

○共通して取り組まれていることは、

・図書館司書が2日勤務しており、図書室運営に当たっている。

・各校とも複数名の図書ボランティアがおり、人の居る温かい図書室運営や読み聞かせ、様々な取組が行われている。

・読書タイムの実施（学校によって回数はことなるが、週2～4回実施）

・学級文庫の設置（精華町図書館より毎学期、団体貸出各学年約100冊程度）

・図書委員会の活動の工夫（図書室等の飾り付け、読み聞かせなど）

・おすすめ本の紹介、ブックトーク、影絵

・「ミニ選書会」などの工夫

・子ども読書推進5カ年計画に基づき活動の報告

○特徴ある取組として

・図書イベントの工夫

おすすめ本の紹介、クイズラリー、しおり配布、読書記録（がんばり）カード、読書ビンゴ、ことわざおみくじ、（POPカード）作成、子どもの本総選挙

・各学年の読書指導の工夫

ブックトーク、本の帯作成など学習指導要領に基づく指導、

・家庭読書の工夫

ブックプレジャー（毎月13日の家庭読書の取組）

・精華町図書館見学

○特徴的課題

・本格的な蔵書整理〈必要な図書購入）等を行い魅力ある図書室づくりを行わなければICT活用に押され図書利用の減少予想されること

・新型コロナウイルス感染拡大防止のため、いくつかのイベントなど実施できなかったこと

・高学年の読書指導の時間確保

3. 研究成果のまとめ等

(1) 研究成果の地域への還元方法

本研究は、3年計画で実施し調査結果を精華町子ども読書推進会議で報告し、協議してきた。（令和3年～令和5年精華町立図書館において3回実施）

特徴的な項目やクロス集計から有意に関連性が見られる項目については、各幼稚園、保育所、小学校での今後の取組の参考にできるように示していきたい。

保幼小連携を踏まえた調査であることから、2年次の内容については、精華町保幼小連携推協議会の研修会において、調査結果を踏まえ読書や語彙に関わる実態や経年変化から考えられる課題や取組との関わりについて報告した。（令和4年・令和5年1月実施）

(2) 研究のまとめ

コロナ禍における3年間の調査となり、調査結果から課題解決につながる具体的な取組の提起等はできなかったが、3年間の調査結果から、非認知能力や認知能力に関わり以下のことが確認できた。

読書活動と生活や非認知能力の関わりについて（5歳児・5歳児保護者）

・幼児期における読書習慣は、保育所、幼稚園での取り組みが大きく影響していること

・幼児期のゲーム・ユーチューブ環境が年々広がり、読書も含め、家庭での過ごし方を保護者とともに考えることが大きな課題となっていること。

・読書が好きな幼児は、自主性や粘り強さが高

い傾向があること。
・保護者の意識や働き方の違いによって、家庭読書環境に差が生じ、幼児の読書習慣に影響を与えていること。
・保護者の読書への期待の高さは、幼児の読書習慣を高める協力を得る土壌であること

以上のことから
○引き続き、保育所・幼稚園での読書の取り組みを継続充実し、読書の楽しみを実感させながら家庭での読書習慣につなげること。
○ゲーム・ユーチューブ等の影響や読書のススメの啓発をあらゆる機会を通して保護者に浸透させ、家庭読書環境を整えることが、求められる。

（小学生）
・児童期の読書習慣は、就学前からの読書の楽しさを基盤にして、いかに習慣付けるかであり、低学年からの積み上げが課題になること
・読書が好きな児童は、自主性や粘り強さ、自己肯定感、他者理解に高い数値があること
・ICT の進展の中で、ICT のスキルとともに、読書で得る力、自己管理力等必要なことを児童と共に確認し合うこと
・学年が上がるごとに生活や興味の幅は広がることを踏まえ、発達段階に応じた手立てが必要になること。特に、プレ思春期（9，10 歳）における自主性を大切にした取り組みを工夫し、自ら本に手を伸ばせる時間を作ることが求められる。

語彙や学力と読書の関わりについて
○語彙調査と学力調査のかかわりから、以下のことが分かった
・幼児期の語彙は、読書も含め生活の中で実感をもって得られることが多い。
・どの学年も 1 か月読書冊数の多い児童は語彙認識度が高い。
・得点の高い児童の語彙認識度は高く、1 か月あたりの読書冊数も多いことが分かった。

反対に得点の低い児童の語彙認識度は高くなく、また 1 か月あたりの読書冊数も少ない。
・学力及び語彙認識度の高い児童の読書傾向を調べると、複数のジャンルの本を好んで読んでいる。様々なジャンルから知識や語彙を広げていると考えられる。

以上のことから、
○幼児期においては、読書を含め生活全般において学力の基礎となる語彙を意識的に増やす保育が必要である。接続期における楽しみの読書指導の工夫も求められる。
○「本が好き」に依拠するだけでなく、言葉の力を高める効果的な読書指導の工夫を授業づくりに取り入れる。
○生活が多様化する小学校中学年からは、発達段階に応じた知的好奇心を伴う読書指導や複数ジャンルの本への興味を高める工夫が日常的に求められる。
○学びや生活の場に本があることが、これからの GIGA スクール時代においても大切である。

本の重要性について、保護者も含めた啓発を進めていくことが求められる。

(3) 今後の取り組みに求められるもの

調査結果から、読書が認知能力や非認知能力の育成に大きな影響があること、その土壌となる幼児期の読書活動も含めた言語環境づくりの重要性を改めて認識するものとなった。また、語彙や学力と読書の関係は、明確な数値として示された。こうした結果から、次の点に留意して取り組みの改善に繋げることが求められる。
○学力や感性の基礎となる語彙を増やすため、幼児期からの語彙指導については、読書を含

め生活全般において意識的に行うことが必要である。また、読書への興味を高め、安定した読書習慣を身に付けるために、接続期における楽しみの読書指導の工夫や家庭の読書環境の充実が一層求められる。

○生活や趣味が多様化し、抽象思考が発達する小学校中学年の読書指導の充実が重要になっている。この時期は読書への興味が軽減し始めることもあり、発達段階に応じた知的好奇心を伴う読書指導（アニマシオン、ブックトーク、リテラチャーサークルなど）や複数ジャンルの本への興味を高める工夫が日常的に求められる。

○ ICT や DX が進展する Society5.0 の社会においても、認知能力・非認知能力育成の視点から、学びや生活の場に本があることは、豊かな成長を促す上で重要である。読書の効果について、学力との関係や非認知能力との関係を具体的な数値とともに、脳の発達や感性の涵養の視点を示しながら、保護者も含めた啓発・周知を進めていくことが求められる。

調査研究を行った3年間は、新型コロナウイルス感染症拡大の時期と重なり、当初予定していた調査や取組が実施できなかったり予定が遅くなったりする等、十分な課題解決の手立て等を示すことができなかった。しかし、研究協力を快く引き受けていただいた幼稚園・保育所・小学校には、丁寧かつ熱心に対応していただき、貴重な調査資料を得ることができ、これからの取組の参考に資すると考える。

調査研究に協力していただきました精華町教育委員会、精華町光が丘幼稚園、精華町聖マリア幼稚園、精華町立いけたに保育所、精華町立こまだ保育所、精華町立山田荘小学校、精華町立精北小学校の皆様方に心から感謝申し上げます。

【研究分担者】
二本柳覚（京都文教大学臨床心理学部臨床心理学科講師）
岡本浄美（京都文教大学こども教育学部こども教育学科教授）
島田香（京都文教大学こども教育学部こども教育学科准教授）
植山俊宏（京都教育大学教育学部国文学科教授）
深田守（精華町教育委員会）
竹花 真治（精華町立山田荘小学校長）
池田 善樹（精華町立精北小学校校長）
伊藤 治子（精華町立こまだ保育所長）
安井 佐織（精華町立いけたに保育所長）
谷口 偉（光が丘幼稚園長）
坂本 佳代子（精華聖マリア幼稚園長）

【付記】
本研究は、2020 ～ 2022 年度京都文教大学地域協働研究教育センター「地域志向協働研究」助成において、研究課題「保幼小と連携した読書活動の推進（認知能力・非認知能力の育成のために－）」（研究代表者：橋本京子）として研究費を受け、その成果を公表するものである。

＜要旨＞

保幼小と連携した読書活動の推進
― 豊かな心と確かな学力の育成のために ―

橋　本　京　子

小学校低学年の学力差の大きな背景に語彙の量と質の違いがあり、その後の学力差の拡大に大きく影響することや、思考を深めたり活性化させたりする語彙の育成が重要であることが指摘されている。語彙を豊かにするためには、読書が有効であることは、これまでの様々な研究成果で示されている。

読書は、多くの語彙や多様な表現を通して様々な世界に触れさせ、言語能力や思考力を向上させる言語活動として不可欠である。さらに、読書は人間形成に大きな役割を担うことも様々な調査に表れている。

多様で膨大な情報が飛び交い、瞬時に判断を求められる時代だからこそ、その思考や判断・表現の基盤を培うために、本（言葉）と向き合い熟考熟慮する知性（認知能力）、本（言葉）の中に心躍らせる感性や想像力、人生と社会を豊かにする人間性や意思（非認知能力）を育む必要がある。

精華町においては、子ども読書活動推進会議を中心に長年町全体で読書活動に取り組んでいるが、一人一人の認知能力・非認知能力をさらに高め、学力の向上につながる手立てとして、より効果のある取組を進めることが求められている。そこで、読書活動を充実させ課題解決を図るために、非認知能力や語彙を育む土壌である就学前教育機関と小学校の連携の中で、「豊かなことばを育み、心を育てる読書活動（認知能力・非認知能力の育成）」について調査研究を進めてきた。精華町子ども読書推進会議とも協働しつつ、読書に関わる実態、語彙力や学力に関わる実態を３年間にわたって調査し、読書が認知能力や非認知能力を育成する上で深い関わりがあることやこれからの取組に求められることを確認した。